【高松法務局長賞】

その笑顔のためにできること

香川県藤井中学校　一年　角岡神楽

私の母は視覚障害者です。右目は何も見えず、左目の視力もあまりよくありません。母は、見えない右目をいつも髪の毛で隠しています。それは、私が産まれた時からだそうです。母の右目は、小さく黒目もにごっていて見ればすぐに他の人と違うとわかります。幼い頃からずっと見ている私は、何の違和感もありませんが、友人から、

「お母さんの目、変じゃない？」

「神楽のお母さんの目、こわい。」

などと、言われたことが何度かありました。私は母のことをそんなふうに言われるのは悲しいと感じながらも、友人達の言葉を聞き流したり、話題を変えて誤魔化していました。友人達から言われたことを母に話すと母はいつも、

「嫌な思いさせてごめんな。」

と謝りながら、見えない右目を更に多くの髪の毛で隠すようになりました。

目の不自由な母に、私が不自由を感じたことは、今まで一度もありません。母は車の運転ができませんが、父や祖母、母の友人などのおかげでとくに困ることはなく、それ以外は、普通のお母さんと同じで普通に働いて、家事をして、私の勉強も教えてくれます。母に対して、不満を抱いたことはなく、むしろ私にとっては、自慢の母です。なのに私は、友人達の言葉に反論するどころか、何も言えず、母への暴言を、なかったことにしてきたのです。

障害のある人を見た時皆さんはどんなふうに思いますか。

「大変だなあ。自分は普通でよかった。」

私はそんなふうに思っていました。ですがそんな私に母は、
「ママは障害者じゃないよ。普通の人よりちょっと見ることが苦手なだけで、それ以外は皆と同じ。神楽も普通の人より片付け苦手やろ？それと同じ。」
耳の聞こえない人は聞くことが苦手な人、足が不自由な人は歩くことが苦手な人、料理ができない人は料理が苦手な人。苦手なことは誰もが必ず持っていて、だから人は支え合って生きていかなければいけない。母の言葉で今まで自分が障害のある人に対して思っていたことや、友人達の言葉に何も言えなかったことがとても恥ずかしくなりました。
見ることが苦手な母が、他の人よりたくさん努力していること、心ない人の言葉に傷付けられていることを私は知っています。それでも母はいつも明るく笑っていて、自分のことよりも、他の人のことばかり心配して助けようとします。会社の人が悩んでいたら親身になって相談に乗り、友達が困っていたら何とか助けようと考え、私達家族のために毎日一生けん命働いてくれます。そんな母の周りには、優しい人達がたくさん集まっているのです。
どんな時でも、強く優しい母の笑顔が私は大好きです。今も私のために隠している右目。本当は隠さなくてもいいよと伝えたいけれど今もまだ時々、誰かの心ない言葉に母が悲しそうに笑うのが辛くて言えずにいます。けれど、言えないかわりに、今まで以上に毎日ありがとうと感謝の気持ちを伝えることにしました。
人はそれぞれ、皆、外見も内面も違います。私はその違いに優劣などはないと思います。美人な人、小さい人、手のない人、車いすの人、話せない人、じっとしていられない人、大声を出す人、スポーツ万能な人、頭のいい人、歌が上手な人、勉強ができない人。どれも全て、その人の持つ大切な個性だと思います。その個性を否定したり、評価

する権利は誰にもないと私は思います。誰かの小さな違いを見つけて、それを否定するのではなく、一人ひとりの個性を一人ひとりが大切に見守ってほしいと思います。

私の母がいつか、右目を隠さずに笑って過ごせるように。

障害者ではなく、〇〇が苦手な人。だからそれは、誰もが同じで、その誰にでもある苦手を、皆が、お互いに支え合い、助け合える。そんな優しい世の中になることを心から願っています。そして、私自身も、皆に助けてもらいながら、皆の助けになれるように、大切な母をずっと支えていけるように成長していきたいと思います。